

商標登録で
“企業防衛”

2025年は、国際協同組合年

— 日比谷公園「花と光のムーブメント」開催! —
Park×Art 日比谷から始まる新しい公園のかたち
「Hibiya Art Park 2025 -訪れるたび、アートと出会う1ヶ月-」

「Hibiya Art Park 2025 -訪れるたび、アートと出会う1ヶ月-」は、昨年同様、山峰潤也氏がキュレーターを務め、花と光に「アート」を掛け合わせ、巨大なパブリックアートを中心とした第1期「Transformed Composition -組み合わせと見立てで遊ぶ-」(4月25日(金)～5月11日(日)まで)と武田知也氏と藤井さゆり氏プロデュースによる、パフォーミングアーツに焦点を当てた第2期「“Play”ing Catch -集まり方の練習-」(5月17日(土)～5月25日(日))により、約1ヶ月間さまざまな作品やプログラムを通して公園でのアート体験を楽しめるイベント。開催を前に去る4月24日、日比谷公園内で記者発表会が行われた。まずイベント主催者の東京都より建設局総務部の新村由美子戦略広報担当課長が「日比谷公園は2022年に開園120周年を迎えた歴史のある、また日本で初めての洋風公園でもあり、様々な表情を持つ公

園に新しい魅力を発信していきたい。1期・2期と1か月間に亘る長い期間を通して、皆様に新しい体験の機会を増やせるよう何度でも日比谷に想いを馳せてもらえたら」と挨拶。次に同アンバサダーを務める俳優の山本美月さん、出展アーティストの上田久美子さん、小金沢健人さん、2期のプロデューサー武田知也さんらが登壇。山本さんは作品を見た感想を聞かれ「多様性を感じる色んな作品があって、自然と調和しているものもあれば、そこにあることに違和感を感じるような作品もあって。(Forest for Momentum について)、真ん中に藤の花が咲いているんですけど、あんな低い位置で藤の花を見ることもないので。調和しているようで、していない違和感が心地いい作品も素敵だなと感じました」と。また、アーティストの一人、小金沢さんは「私は場所を創るのが仕事です。場所とは土地と空間の間に生まれるもの。そしてそこに人間が関わることによって場所になる」という大前提を基に、日比谷公園の歴史を紐解きながら今回の作品づくりのコンセプトを熟弁。

アンバサダー・山本美月さんの
チャレンジしたいこと

アート好きとして知られる山本さんは「私自身も絵を描いたりするのが好きで、本を出版した

際には個展もやらせていただいたり。普段も家族でギャラリーに行ったりしています」と。また同イベントの楽しみ方についても「野外でのイベントなので、晴れている日だけでなく、あえて曇りの日、雨の日…見える景色が変わって見えると思います。自然の中だからこそできるアート体験や、週末にはキッチンカーも並ぶのでお昼食べて夜ライトアップされたアートを見たりとか、いろんな楽しみ方ができると思いました」と推し。更に、代表質問の中では、ご自身で絵も描かれていると思いますが、アートで今後挑戦してみたいことはと問われると「これまでだと本を出させていただいたり、個展をやらせていただいたりしたことはあるんですけど、できれば絵本を描いてみたいと思っています。中学・高校の時は漫画を描いていましたが、絵本はまだ描いたことがないので挑戦したいと思っています」と回答した。(2ページへ続く)



アンバサダー・山本美月さん
撮影:大倉裕一



左より:武田、上田、小金沢、山本、新村の各氏
撮影:大倉裕一

緑の募金を活用した能登半島地震被災地の支援

「令和6年能登半島地震」は、能登半島を中心に甚大な被害をもたらしました。被災地域の皆さまに心よりお見舞い申し上げます。

(公社)国土緑化推進機構では、これまで「緑の募金」復旧支援使途限定募金(地震被害)により、能登半島の避難所でのプライバシー保護や生活環境の改善等のため、石川県産材等を活用し組み立てた什器【組手什※】の提供や仮設住宅団地や復興商店街等への木製プランター・苗・木製テーブルベンチの提供、そして、能登町の森林体験施設の復旧支援などの事業を実施しています。

石川県能登町の森林体験施設「ケロン子ども森の学校」は、2014年の開設以来毎年、自然観察会や森の探検会、森の清掃や植樹活動等の自然体験や環境教育を実施し、子どもたちが能登半島の自然の豊かさや大切さを学び、体験する大切な役割を果たしてきました。

しかし、令和6年能登半島地震でガケ崩れや地割れ、倒木等の甚大な被害を受け、活動を休止せざるを得ない状況に陥りました。一日も早く、子どもたちの森林体験活動を再開するため、私たちは、森に多数生じた地割れや亀裂等を子どもたち自身の手で、森の自然素材を活

用して復旧活動に取り組むことにしました。

また、今後は公共施設や居住地域周辺の緑化、近隣の森林里山の復旧・再生、コミュニティ再生や被災者同士の交流・健康・生きがい、子どもの遊び場づくり等にも寄与できる緑化活動等への支援を考えています。

さて、5月は「緑の募金」の春の募金期間(1月～5月)の最終月となります。「緑の募金」は、個人及び団体から広くご寄附を募り、国内外で森林整備や緑化推進の活動を実施する市民ボランティア団体等の支援に活用するものです。

「緑の募金」のうち、特に、地震災害被災地の復旧・復興に向け緑化等を通じた支援をするため、被災地支援に使途を限定した「復旧支援使途限定募金(地震被害)」の受付を行い、被災地の要望に添った支援を実施することとしています。

これまでも、熊本地震や北海道胆振東部地震等の被災地の復旧支援に取り組んできましたが、令和6年能登半島地震につきましても、被災された方々の生活環境の向上・復旧等を目的としたボランティア活動を、長期的に支援していくこととしています。皆様からの温かいご協力をお願いします。



森の学校 ボランティアによる復旧活動



地割れ復旧作業

森の学校 復旧植樹



木製プランター等提供支援



組手什を使って棚を製作している様子

復旧支援使途限定募金(地震被害)の受付

緑の募金

Q 検索



※【組手什(くでじゅう)とは】

長さ約2m×幅40mm×厚さ15mmの間伐材等に“組手(くで)”とよばれる溝加工が施されており、数本～数十本を組み合わせると収納棚など様々な用途で使用が可能です。主な特徴は、何でも作れる。誰でも作れる。何度でも使える。といったスグレものです。